

P2-023

看護学生における家族支援教育プログラムによる社会性の変化

古川 照美¹、生島 美和²、増田 貴人³¹青森県立保健大学 健康科学部、²弘前学院大学 人文学部、³弘前大学 教育学部

【目的】

少子高齢化の進展により、家族形態の変化、家族の価値観が多様化している中で家族支援実践者には、地域の文化の多様性をふまえ、社会性を高め支援していく力が求められている。本研究では、子どもの健やかな成長を育む家族支援に携わる可能性がある看護学生に対し、家族支援教育プログラムを実施し、学生の社会性の変化について明らかにする。

【方法】

A大学看護学2年生を対象に、家族支援プログラムを実施した。家族支援プログラムは、家族の機能・家族の構造、家族支援(援助)とは、障害のある子どもと家族看護、地域で育児をするということ、地域で支援するというところについての講義を8時間実施し、その後、グループに分かれて、家族を含む地域住民対象とした企画を計画実施した。実施後に社会性の変化を問う質問紙による調査を実施した。社会性についての項目は、社会関連性指標の5領域「生活の主体性」、「社会への関心」、「他者とのかかわり」、「生活の安心感」、「身近な社会参加」である。調査は個人情報扱わない無記名自記式質問紙であり、研究の趣旨について口頭および紙面で説明し、自由意思による回答を得た。

【結果】

回収率は92.8%であり、回答を得られた103名の結果について、「生活の主体性」では、55.3%がかなり変わった、やや変わったと回答していた。自身が体験した企画に関連した健康意識の向上に関する変化の記載が多かった。「社会への関心」では、37.8%であり、ニュースをみるようになった、健康情報番組やイベント・ポスターに目を向けるようになった、ボランティアをやってもいいと思うようになったといった変化が多かった。「他者とのかかわり」では、42.7%であり、家族と会話する機会が増えた、散歩中の高齢者と話す機会が増えた、知らない人とも会話ができるようになった。祖父母とはゆっくり話すようになったと回答していた。「生活の安心感」では75.7%が変わらないと回答していた。「身近な社会参加」では、31%がやや変わったと回答しており、近所の人にはあいさつをするようになった、家の仕事を手伝うようになった、ボランティア活動に積極的に参加したい、地域の活動に参加してみようと思った、等と回答していた。

【考察】

約4割程度の看護学生の社会性の変化に寄与できたと考えられ、さらに学生自身の健康意識の向上、家族や地域の人々への関心の向上につながるプログラムであると思われる。

P2-024

保育園に勤務する保育士および看護師の病児・病後児保育への関心

中村 明子¹、西田 志穂²、飯村 直子³、
吉野 純¹、赤津 美雪⁴¹杏林大学保健学部 看護学科看護学専攻、²共立女子大学 看護学部、³首都大学東京 健康福祉学部看護学科、⁴日本赤十字社医療センター

【目的】

以前我々が行った研究では、病児・病後児保育(以下、病児保育)施設の保育士および看護師(以下、保育者)は、よりよい支援のために他施設との連携が必要と考え、その方法を模索していた。しかし、病児保育に対する関心は施設によって温度差があり、具体的な連携についてはほとんど明らかになっていない。そこで、病児保育施設と他の施設との連携の可能性について今後の充実を図るために、保育園に勤務する保育者が病児保育をどのようにとらえているのかを明らかにする目的で本研究を行った。

【方法】

質的帰納的研究法

研究参加者：首都圏にある病児保育施設の併設がない保育園4園に勤務する保育者14名。

データ収集：インタビューガイドを用いた、施設ごとの半構成的なグループインタビューを実施。

データ分析：逐語録を作成し、データ間の共通点や相違点を踏まえて質的帰納的に分析、研究者間で協議しデータの妥当性を確保した。

倫理的配慮：研究者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

保育者は病児保育について、次のようにとらえていた。

1. 病児保育の存在は知っていても、そこでの子どもの生活は知らない

病児保育については、利用中の子どもの様子を聞く機会が少ないため、一般的な知識しかなかった。「最終手段」で「預かってくれる」イメージは持っているが、所在地や料金から利用しにくいと思うこともあった。

2. 子どもが休んだ時、どこでどのように過ごしていたのかはあまり気にならない

子どもが休んだ後の登園は、集団で過ごせるかという視点で体調を把握していた。子どもが「概ね普段通り」で「そこからはずれていないか」の確認に過ぎず、休んでいた間の様子はあまり気にしていなかった。

3. 状況が整うのであれば連携してもいいと思う

保育者は「個人情報のことがクリアになったら」などの条件はあるが、状況が整うのであれば、連携や情報交換、あるいは情報共有することが望ましいと思っていた。

【考察】

休んだ後の登園再開は、子どもが「集団で」過ごせることが前提で、保育者にとっては休んでいた間の様子よりも、登園した目の前の子どもの状況が重要だった。保育者は保育園と病児保育施設の連携によって、子どもの保育に還元できることがあるとも考えていたが、具体的な方法の言及はなく今後の課題である。

*JSPS科研費26463418の助成を受けた研究の一部である。